

ある世代から次の世代へと引き継がれてきた行動様式は「文化」と称されている。この定義によると、自文化では一定の行動様式は当然のこととして受け入れられ、当たり前知識となつていますが、異なった文化圏に接してみても、初めての相手の文化との違いに気付く。

1976年、フルブライト奨学生として、私は米国の首都ワシントンD・Cの大学に日本語教師として派遣された。それは私にとって初めての異国への旅立ちであった。日本から米国東部へは長旅なので、途中ハワイに立ち寄り、新しい空気を吸い、周りの変化を少しずつ感じながら、最終目的地に向かうほうがよいのではないかとこのアドバイスを受けて、まず、ハワイへ飛んだ。

滞在先は広大な土地に位置し、その一角に教育施設を備えていた。庭に出てみると、数本の木々に黄色の大きな実がたわわに実つていた。それはグレープフルー



異文化体験の諸相

ツであった。収穫した後、数日間ねかせておくと、その実は次第に熟して「果物」になるということであった。私にとって、グレープフルーツはスーパリーの店先に並んでいる生産品であり、枝につながらつている実物を目の当たりにして、不思議な感覚を覚えた。

夜になると、私の部屋の隣室から犬の鳴き声が漏れてきた。うとうととしてみると、その犬の大きなうなり声で目がさめた。「なんと非常識な住民と犬なのだろうか」とイライラし、腹立たしく思った。

ところが、翌朝、その犬は飼い主である隣人と一緒に、「仕事」へさっそうとでかけて行った。当時、米国では発達障がいの子どもに対する治療の一環として心理療法がいち早く導入されており、子どもに寄り添うことが効果的であるとの教育的配慮から、治療犬としての共生を目的としたプログラムが盛り込まれていたのである。

「文化」といえば、食生活とも密接な関わりがある。30数年前、アフリカのコンゴ民主共和国（当時のザイール）で、私の所属している修道会が養成者会議を開催した。会議の前に、ローマの本部から必要事項としてメモが送られてきた。そこには、「スカートを着用して参加すること。その理由は、ストラックスは男性用の衣装として解釈されているから」とあった。忠告に従って、私たちはコンゴに飛び立つ前に、ブリュッセルで全員スカートにはきかえた。

会議が始まってみると、食事のテーブルにはスूप、パン、野菜などいつも食べ慣れているものが並んでおり、特別な違和感を覚えなかった。会議が終了する前日に、開催地のシスターたちが五大陸出身のわれわれに祝宴を開いてくれるといううれしいニュースが耳に入ってきた。

パーティ当日、コンゴ人の若いシスターたちが外で火を焚いていた。好奇心

津田 葵 ● 学校法人ノートルダム清心学園理事長

からどんなごちそうを準備してくれているのかと近くに行つて、のぞき込んでみた。ところが、たき火の上に「ゴキブリ」が並べられていた。びっくりしてその理由を尋ねると、「ゴキブリはカルシウムを豊富に含んでおり、体にもよいし、お客様への最高のおもてなしの品なのだ」と得意気に答えてくれた。

パーティが始まり、ベルギー人のシスターたちがおみやげとして持参してくれたビールを口に含み、私は意を決して、その「ゴキブリ」を一気に飲み込んだ。礼に反しないためにそうせざるをえなかったからである。

「郷に入れば郷に従え」。いろいろな場での異文化接触・異文化体験から見えてきた文化的価値観と、その背景的な知識は、どの文化が優れているか、あるいは劣っているかではなく、その違いに気付き、どの文化も固有で、対等で、素晴らしいということを私に教えてくれている。